

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 井田 仁康 会員数 約500人)

TEL 042-329-7729

地 理 A

1 前 文

「大学入学共通テスト」となって2回目の試験を迎えた。これまで「地理A」科目で出題されてきた、現代社会における諸課題やグローバル・地域的な視座に立った諸事象、さらには地図やGISを用いた地理的技能の習得などの内容が、今回の試験において、どのようなかたちで反映されているかについて、総合的に検討・評価を実施した。

2022年度からは「地理総合」が必修となる。共通テストにおいては「地理総合・地理探究」および「地理総合・歴史総合・公共」といった枠組みで出題されることになっている。「地理総合」は、新しい学習観・学習方法に基づいているが、内容的には「地理A」を引き継いだものとなっている。こうしたことから、共通テストの「地理A」は今後の共通テストの方向性を示されているものと考えられる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 地理的技能と活用が3問、日本の自然災害が3問の構成となっている。これまで大問の説明としては、地理的基礎事項と称してきたが、昨年は地理的基礎という言葉が消えた。今年も同様である。しかしながら前半3問の地理的技能と活用については、基本的な問題が多く、従来の基礎事項取り上げてきた流れを踏まえているようだ。問6のように、災害に対する思考力と読図力と合わせて問うような出題をお願いしたい。

問1 時差計算に関する問題。航空会社のフライトスケジュールを用いており、日常的な素材から作問している点は評価できる。地理的技能をきちんと学習できているか問うており、基本的な問題となっている。

問2 階級区分図の区分や濃淡などについてたずねた問題である。統計地図に関する基本的な問である。新聞やニュースなど日常生活の様々な場面で見かける統計地図であり、基本的な「文法」は押さえておくべきだと考える。今後もこのような観点での出題を望みたい。

問3 これまで、俯瞰図と地図との対応を問う問題が主流だったが、ここでは地図中の地点と見通せる領域とを結びつける形式となっている。これはカシミール3Dなどでよく知られているが、受験生にとっては目新しく、時間がかかったと思われる。等高線から現地での地形をイメージする力が問われ、良問と判断したい。

問4 ハザードマップの公開状況分布から、災害の種類を問うている。近年法律の整備が進み、様々な災害に対して多くの自治体がハザードマップを作成しているので、時宜を得た出題である。各災害の特色や分布の理解から回答することができる。

問5 自然災害に対する備えをたずねている。このような出題の場合、写真がきちんと読み取れるかが重要となる。この問では写真ごとの短文を示しているため、着眼点が明瞭で、良い問題となっている。

問6 避難経路の読図問題。短文中の避難時間に関する文章や標高から解くことができるので、読図としては基本的である。防災教育においては災害時における判断力を養成することが重要であり、そのような力を評価する問として優れている。

第2問 世界の生活・文化に関する大問。すべての問題に図、資料、グラフ、統計資料、写真を用いている。単に知識を問うのではなく、多面的に地理的事象を読み取らせようとする姿勢は評価できる。

問1 住居平面図の読み取りに加え、各地域の自然環境、宗教、文化の理解をふまえた、地理的思考力を試す良問といえる。

問2 国歌の歌詞を設問に取り入れて目新しさを出したものと思われる。地理の問題としては見慣れない形式ではあるが、歌詞の中に各国の地理的特徴を示すキーワードがあるため、解答は難しくない。

問3 自然環境と生活との関連を扱った地理Aらしい出題といえる。写真を用いているが、カラーで鮮明になればキャプションは不要になる。教科書レベルの基本的な問題。

問4 写真を用いた設問形式ではあるが、写真を見なくてもキャプションを読めば解答できてしまう。モノクロなので制約はあるかもしれないが、もう少し、写真から読み取れる事象を問うような設問にしてほしい。

問5 Pはインドで多いことから食料、チは国民皆保険制度がなく、医療・保健の支出が多くなっているアメリカであることがわかる。医療制度は国によって違うことはよく知られており、解答は難しくないであろう。

問6 歴史のあるヨーロッパと周辺国で割合の高いマを文化遺産と判断すれば解答できるが、やや難しいかもしれない。

第3問 熱帯地域における生活・文化に関する大問。日ごろの教室での学習を想定した出題となっている。雨温図の読み取りや、プランテーション作物の比較といった基本的な内容が問われており、難易度は高くない。

問1 バナナの生産量と輸出量の上位国の違いから、自給的な作物としての栽培か、商品作物としての栽培かを考えさせる問題。農業の基本的な考え方を問うている。

問2 雨温図から熱帯地域の気候の特徴を読み取り、場所と植生の写真を選ぶ基本的な問題。

問3 中央アメリカと東南アジアの主な食べ物に関する問題。それぞれの地域の主食が何であるのかが分かれば簡単であるが、作物そのものではなく、料理した写真とその食料供給量から推測させる点では工夫されている。

問4 米とトウモロコシの生産量の推移を3地域で比較する問題。グラフの縦軸の指数がヒントになる。バイオエタノールとしての利用が拡大している作物が分かれば難しくない。

問5 穀物自給率の階級区分図を読み取る問題。アフリカで輸出される作物の特徴が理解できていれば容易である。

問6 農業問題の解決策を答える問題。ブラジルに代表されるようなモノカルチャーから多角化への変化は基本的な知識である。

第4問 地球的諸課題に関する問題。地図やグラフを活用した出題。昨年度よりも持続可能な社会を意識した問いが増えており、地理総合を意識した内容といえる。地理総合においても、SDGs(持続可能な開発目標)と学習内容との関連が求められているため、他の大問においてもSDGsとの関連を示しても良いのではと思われる。しかし、学習過程を示した模式図を用いた問題や、理論から思考する問題(昨年度はバージェスの同心円モデル)がなくなり、センター試験時に近づいた印象が否めない。大問全体としてのレベルは標準である。

- 問1 石油の確認埋蔵量と可採年数に関する問題。グラフが提示されているが、知識を問うレベルの問題でもう一工夫ほしい。標準的なレベルの問題。
- 問2 GDP当たり1次エネルギー消費量の背景に関する問題。各選択肢に関して細かい部分での正誤を問うている(インドの「石炭」、ロシアのエネルギー効率が「低い」など)。知識を問う問題が続いていることから、大局的な視点から思考力を問うとバランスがとれるのではと考えられる。やや易しいレベルの問題。
- 問3 森林面積の割合と変化から、地域を類推する問題。森林面積の割合で各地域を類推するのは難しく、森林面積の変化率と天然林・人工林の判別で地域を類推した受験生が多かったと思われる。やや難しいレベルの問題。
- 問4 水不足に関する問題。自然的条件・経済的条件による水不足を地図上での分布で考えさせるのは良い視点だが、水不足に対する取組みについては知識そのものを問うレベルになっており、出題方法にもう一工夫欲しい。SDGsのNo. 6「安全な水とトイレを世界中に」と関連させるのも一つの方法である。
- 問5 人口増加率に関する問題。教科書レベルの標準的な問題で、出題方法にもう一工夫欲しいが、大問全体のバランスを考慮すると適度である。
- 問6 1人あたりGDPと平均寿命に関する問題。グラフの基本的な読み取りであり、大学入試の問題であることを考えるともう一段階思考させるプロセスが欲しい。
- 第5問 従前からの地域調査に関する出題で「地図とGIS」について十分に意識された出題となっており、地域調査の学習が「地図とGIS」をより意識する必要性をも示している。地域調査についての必要な技能(空中写真と自然環境関係の図、主題図、斜め写真、地図と現地との照合、統計グラフ)を用いた問いかけののち、最後の小問でまとめをするという構造である。多面的な出題をしているが、前半3問の解答方法がいずれも文章の正誤を答えるものとなっており、似た思考での解答となってしまったことがやや残念である。全体的には単なるテスト問題にとどまらず一連の地域調査学習ともなって全体としても良問に仕上がっている。
- 問1 空中写真と河川の縦断面図と雨温図を組み合わせた自然環境を概観する問題。地形、気候とバランスよく問いかけている良問。会話文も天竜川流域の特徴を的確に表現している。空中写真はそろそろ本格的にカラーが必要ではないだろうか。
- 問2 自然現象(地形)と人文社会現象(人口)のメッシュデータを使ったメッシュ地図と、小地域(小学校区)単位で表現した図形表現図と、主題図の基礎的表現を利用した出題となっている。このような出題はとても手間がかかるが、必ずや良問となるので、ぜひ、継続して出題をしてほしい。「国土交通省の資料など」という出典となっているが、「国土数値情報を利用して作成」などのようにもう少し具体的に記すことで、実際に作図ができるようにすると学習の励行となろう。
- 問3 斜め写真を用いて天竜川流域の独特な田切地形に基づく出題で、良問であるが、問1でも写真(空中写真)を使っただけの出題であるので、ここは地図(地理院地図)を使って出題でよかったのでは。また、解答方法も会話文における正誤判断と同じようなものとなってしまったので、別の解答方法にしたほうがよかったのではと思われる。
- 問4 地図と現地との照合の技能を景観の読み取りをさせ、防災のテーマでの問いかけに使った出題であり良問に仕上がっている。防災については、現地との関係は不可欠であり、地図と現地との照合という地理における基礎的な技能の有用性を問いかけるにふさわしい出題となる。良問である。
- 問5 空間的相互作用(東京と名古屋の卸売り市場との関係)と場所・地人相関(農作物の特

産品)という二つの事象をクロスさせ地理的な見方・考え方を働かせて解答する良問である。
問6 この大問のまとめの問題であり、SDGsを意識し、持続可能というキーワードのもとに問題を締めくくっており、作問の工夫がよく伝わる良問である。

3 総評・まとめ

今年度の地理Aの出題内容および難易度設定は標準的であり、適切であったと考える。基本的には従来の出題形式を踏襲したものが多く、受験生に安心感があったのではないかとはいえる。これは、地理が早くから新しい学習観に基づく出題をしてきたからともいえる。第4問では、持続可能な社会の実現(SDGs)に関する問いが多数出題され、2022年度から始まる「地理総合」を強く意識した内容になっていた。第5問の地域調査では「地図とGIS」に関する内容が出題され、大問全体で一連の地域調査学習を完結させる構成となっており、いずれも良問といえる。

4 今後の共通テストへの要望

地理的技能に関して、地図やGISの活用については進展がみられる。しかしながら、写真を用いた設問(写真の読解)では、写真を見なくてもキャプションだけで解答できてしまうものも散見された。景観を読解し、分析する技能は地理において基本的技能に属する。試験において現地観察は不可能であるから、その代替として写真や地図等を用いることは理にかなっている。しかしながら、これについては、従前から指摘しているように、問題の一部カラー化・鮮明化を強く望みたい。

さらに、昨年度は、共通テスト開始初年ということで、出題形式に新たな工夫が各所でみられたが、今年度は、従前のセンター試験時代の出題形式に戻ってしまった箇所が多い印象である。次年度は出題内容の精選とともに、受験生の思考力を的確にみることができ、多様かつ意欲的な出題形式の問題制作を期待したい。

地 理 B

1 前 文

共通テストは2回目となり、来年度からは新学習指導要領が実施される。今回の共通テストの出題は、令和4年度入試というだけでなく、今後の大学入試の方向性や新課程における高校の授業の在り方に大きな影響を与える。そこで、新学習指導要領で求められている新しい学力観がどのように反映されているかを中心に検討した。「地理」は、従来から「地理的な見方・考え方」を重視しており、新しい学力観はその延長にあるともいえるが、探究的な方法など新たな方法もある。

本年度の出題は、昨年度に比較して、新しい学力観への対応というより、従来の方法を踏襲したものが多という印象である。

出題構成は、世界の自然環境と自然災害、製造業のグローバル化、人口と都市、ヨーロッパの地誌、地域調査と5題の大問で、現行の学習指導要領を踏まえると適切である。問題数は昨年同様、30問であった。共通テストでは複数のデータから考えさせる設問や、データを読み取り会話文の正誤を判断する設問等、解答に時間を要する設問が多いため、30問程度の問題数は妥当であろう。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 世界の自然環境と自然災害に関する大問である。図や表から読み取れることと地理的な知識・概念を結び付ける問題が多くみられた。一方で、昨年度の共通テストでみられた、仮説を立てて検証する問題や、概念図を用いて考察させる問題はみられなかった。後半部分では、自然環境に関する知識を用いずに図の読み取りのみで判断できてしまう問題がみられ、改善が必要である。また、自然環境や自然災害と人間活動との結びつきに着目した問題を今後は期待したい。

問1 季節風のメカニズムや海流、気候分布の知識を働かせて解答する思考力を問うた問題である。受験生にとっては、西端、東端、1月、7月と考えるべき項目が多くあり、思考やプロセスの整理が大変であったと推測される。やや難しい。

問2 各地点でみられる植生と土壌の特徴とを結びつける問題である。気候に関する基本的な知識を問う問題であり、難易度は容易であった。

問3 世界の湖の水深、塩分濃度について問うた問題であり、湖の成因ならびに位置する気候条件から考えて判断する問題である。取り上げられた3つの湖はそれぞれ異なる特徴を持つため、判断が容易である。

問4 気候変動による海進、海退の関係性とそこでみられる地形について問うた問題である。比較的容易に判断することができる問題である。

問5 突堤建設による海岸線の変化について図や表から読み取り、考察する問題である。①②は図表の読み取りである。③は図から思考を働かせて沿岸流の向きを答える問題である。難易度は易である。人間活動と地形変化の関係性についてより深く考察する問題としたい。

問6 津波による浸水被害と自然地形との関係性について問うた問題である。選択肢のほとんどが、図を見ると地理の知識がなくても解くことができるため、地形の知識や概念を用いて浸水被害を考察するプロセスを求めたい。難易度は易である。

第2問 製造業のグローバル化をテーマにした問題である。自動車産業のグローバル化への対応や各種製造業の世界的分布、知的財産使用料とGNIとの関係など、現代社会の工業を取り巻く状況について、幅広い知識を問うている。問題設定で「探究」をうたっているが、設問は従来

の地理学習の枠組みにとどまっておらず、もう少し新しい切り口があってもよかったのではないか。全体として問題も難易度は適切である。

問1 新聞記事と各国の自動車生産台数の資料をもとに、会話文を完成させる問題。近年の変化が著しい自動車産業の状況に日頃から関心をもって接していれば、解答は容易。

問2 様々な工業製品の貿易について、世界の分布を判定する問題。衣類、航空機、テレビといった、分布に特徴のある項目であったため、判定はしやすかったのではないか。難易度は標準的である。

問3 製造業と非製造業の割合の変化をもとに、国名を組み合わせる問題。例としてシンガポールが提示されており、これを参考にすると、判定は容易である。

問4 三角グラフを用いて、各国の産業別人口構成の変化を読み取る問題。それぞれの特徴をグラフに照らし合わせれば、組み合わせは判定しやすい。問題の難易度はやや易。

問5 知的財産使用料とGNIとの関係をもとに、会話文の正誤判定を行う問題。知的財産権や経済連携協定など、グローバル化する現代社会で正しい理解が必要な項目が取り上げられている点は評価したい。難易度は標準的である。

問6 製造業のグローバル化について、要点を整理する問題。資料に提示された内容をしっかりと読み取れば、語句の選択は容易である。

第3問 人口と都市に関する大問。グラフや地図から読解させる問題が中心。地理的な思考力を必要とする良問が多く、地理Bの出題としては評価できる。しかし、「探究的」な手法が求められる「地理探究」との連続性を考えると、もう一つ工夫が必要ではないか。

問1 どの国を問うかによって、質や難易度が左右される。示された4か国は適切であり、良問といえる。

問2 図2の判別は容易。一方、図1の判断ができない受験生が多かったのではなかろうか。3か国の選択は適切である。

問3 この事実については学んでいるだろう。グラフで出題したところに工夫がなされている。

問4 世界経済の変動についての問題。問題作成に当たっての工夫がみられる。受験生には初見の形式であろうが、世界の社会経済に関心を持っていれば、解答は難しくない。

問5 地図化されたデータを読解する、地理的な思考力を必要とする良問である。キとクの分布の違いの判別がやや難しいかもしれない。

問6 大都市郊外に居住する生徒にとっては日常の光景かもしれない。単にグラフの年代を聞くのではなく文章と組み合わせて答えさせることによって、事象の意味を考えることの重要性を示しており良問といえる。

第4問 ヨーロッパに関する大問。内容的には伝統的なものが多く、日ごろの学習の成果を測るには適切であろう。地誌の広範な領域をカバーしようという意図だろうが、各問が独立しており、相互の関係は見られない。新学習指導要領では、地誌学習においても、ストーリーもしくは「課題設定」が求められる。本大問では、こうした工夫がなく、「地理探究」への継承を考えると、やや物足りない。この問題を見れば、地図や写真・表・グラフを活用した問題が多いことは評価できる。

問1 位置で問うている点に作題のセンスを感じる。定番の問題ともいえるが日ごろの学習を測るには適切である。

問2 写真を用いた問題。キャプションがなくても十分解答可能。写真が不鮮明の場合は、キャプションが不可欠であるが、今回はいらなかったのではないか。基礎的なレベルの問題。

問3 ヨーロッパの地域差を考えるうえで適切な指標である。大学入試のレベルとして適切である。地図にはアフリカの国は入り込んでいる。単に白抜きにしてあるが、凡例に記す等の処理が必要ではないか。

問4 位置や空間的相互作用は重要な地理的な見方や考え方の一つであり、与えられた情報から解答を考えることが可能な良問である。しかし、何に着目したらいいのかわからなかったという受験生も少なくないと思う。正答率は低いのではないか。

問5 言語に関する問題。基礎的な知識を問うており、地理Bらしい問題といえる。一方で「地理探究」への方向性を考えると出題方法の工夫が必要である。

問6 地域の変容を読図の形で出題しており、工夫がみられる。しかし、ヨーロッパやドイツの産業構造の変化などと組み合わせるとよいかもしい。

第5問 (地理Aと共通のため省略)

3 総評・まとめ

全体的に出題内容、問題数や設問形式は概ね適切であったと思われる。また、一部に大学入試問題としては易しいと思われる問題も見られるが、全体として問題の難易度は適切である。

日ごろの学習を重視するという点では、多くの問題が今までの出題形式や内容などを継承しており、一定の評価はできる。また、地理Aと共通の第5問では、新課程の「地理探究」を見据え、SDGsを意識した設問で締めくくっている点も評価できる。しかしながら、地理Bのみの問題では、「地理探究」への展望が十分に見ることができなかった。

これまで同様、単純に知識を問うのではなく、資料・主題図・グラフ・統計・写真等を用いて多面的に地理的思考力を測ろうという姿勢は評価できる。日頃の地理学習の成果が試されるこのような形式の問題を今後も継続して出題していただきたい。

4 今後の共通テストへの要望

共通テストは、高校現場の教育方法や内容に大きな影響を与える。来年度からは新学習指導要領による教育が実施されることを考えると、新しい教育の方向性を示すことが望まれる。こうした点から以下の点については改善を望みたい。

- 1) 資料重視の方向性は好ましいものであるが、資料の適切性あるいは限界について丹念な検討が必要であろう。以前から要望しているところであるが、写真資料・空中写真のカラー化が行われれば読解の質が大きく変わる。このことについては早急に検討していただきたい。
- 2) 「地理探究」への連続性・継承を考えると、設問にもう少し新しい切り口・工夫が必要ではないだろうか。昨年度の自然環境と災害に関する大問にみられたように、仮説を立て、それを検証するような形式の問題があってもよかったのではないか。
- 3) 一方で、地理の知識がなくても、文章資料や図の読み取りだけで解答できてしまう設問がみられた。読解力を試すという意図は理解するが、地理の学習内容（知識や技能）が解答に反映されるような設問を望みたい。
- 4) 上記とも関連するが、新学習指導要領では「深い学び」が求められている。「深い学び」と各教科・科目にかかわる概念を用いて「熟考」することが必要となる。一つあるいは複数の資料を「地理学」の概念（地理的な見方・考え方）を用いて、じっくり読み解くような問題も必要ではないか。また、新しい学力観には思考力・判断力・表現力等が含まれている。思考力・判断力はともかく、表現力はマークシート方式で測ることは難しいと思われる。どのような形で学力を測定するのか今後も検討が必要であろう。

② 全国地理教育研究会

(代表者 高橋 基之 会員数 約300人)

T E L 03-3946-9668

地理A・地理B

1 前 文

全国地理教育研究会は、主に全国の高等学校で実際に地理を担当している教員を中心として構成された研究組織で、会員は年一回の研究大会と年二回の会報の発行を軸に研鑽を重ねている。それだけに、大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という）の問題には強い関心を持っており、毎年のセンター試験実施後の検討会に引き続き、共通テストについても検討会を設け、追試験を含めさまざまな角度から意見交換を行っている。

今年度は、共通テストへ移行して2年目の出題であったが、地理Aにおいても地理Bにおいても、本試験、追試験ともに、昨年度と大問数や構成に大きな変化はなかった。試行調査以来出題されてきた学習の過程を意識した場面を設定した大問の出題は、今年度も本試験、追試験ともにみられ、こうした点も定着したものと思われる。なお、昨年度共通テスト(2)で出題された地理Bの地誌の大問における比較地誌の出題が、今年度本試験でみられたが、追試験では出題されなかった。小問ごとの分析では、知識・理解をもとに思考力や判断力を働かせて解答する問が多く出題されたこと、提示された資料等が豊富で特にグラフの提示が多かったこと、組合せ選択の形式のものが多かったこと、などが本試験と同様に目立った。こうした点等に注目しながら、以下に本会の意見・評価を述べていきたい。

2 試験問題の程度・設問数・形式等

(1) 試験問題の程度について

今年度の本試験の平均点は、地理Aで51.62点、地理Bで58.99点であったが、追試験では地理Aは同程度の難易度、地理Bがやや易しい印象である。追試験でも本試験同様、全体として、高等学校までの学習内容に概ね沿った小問が圧倒的に多く、学習範囲を逸脱した難問や奇問はほとんどみられなかった。

地理Aでは、資料が豊富に示され、複数の資料を照らし合わせるなどして解答に時間を要する小問が多くみられた。また、組合せ選択による小問も本試験同様に多かった。しかし、資料に丁寧に向き合えば、問われている内容そのものは、標準的なものが多かった。これらの点は、いずれも本試験と同様であった。小問の中には、低くはない知識レベルが扱われたものも見受けられたが、正解を得ることが著しく困難な問はなかった。本試験での講評に引き続き、地理Aでは、知識の有無に特化せず、資料の読み取りや活用、思考・判断をともなう問の数を増やすよう求めたいが、いたずらに資料の提示数を増やすのではなく、資料数を吟味し、場合によっては解答数を減少させるなどして、解答時間にゆとりを持たせた上で、じっくりと提示された資料に向き合うような問の作成をお願いしたい。

地理Bについては、地理Aと同様に、豊富な資料が提示されたものの、本試験よりも精選された印象である。しかし、高得点者の割合が、世界史B、日本史Bと比較すると少ないであろうと考えられる点に変わりはない。地理Bにおいても一定の知識レベルが要求される中で、提示された図表や地図、設問文などを通して思考・判断を要する小問が多く、短時間で解答にたどり着け

るような小問が少なく、解答に際して多くの時間をかけて考えることになる。その上で、複数の事項について検討し解答する2×2の4択等の組合せ選択の小問も多い。こうしたことが高得点者の少ない要因であることは、追試験においても同様である。来年度以降は、地理A、地理Bともに、地理を学習した生徒が、しっかり学習をすれば満点に近い得点がとれるような作問を切に願うものである。

(2) 設問数や大問の構成、形式について

大問数は地理Aが5問、地理Bも5問で本試験と変わりなかった。また、小問数は地理Aで30問、地理Bでも30問で、一つの小問を二つに分割したものは追試験ではみられなかった。大問ごとの小問は、地理A、地理Bともにすべて6問ずつで、この点も変わりなかった。小問数はセンター試験よりも減少したものの、地理A、地理Bともに、地図、グラフ、表、写真などの資料は豊富で、解答に時間を要し見直す余裕も多くはなかった。小問数のさらなる削減を要望したいが、少なくとも今年度の小問数を維持していただきたい。

大問の構成についても、本試験と変わりなかった。また、地理Bでは本試験でみられた地誌の大問中の「比較地誌」の小問はみられなかった。「比較地誌」の小問は、昨年度西アジアが扱われた共通テスト(2)、今年度ラテンアメリカが扱われた本試験で出題されており、発展途上地域を扱った場合に比較地誌的な小問が出題されている。地誌に関する大問の削減を見据え出題教科・科目の問題作成の方針には、「系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題の検討」との内容が示されていたが、そうした問は追試験においてもみられなかった。「地域調査」の大問が地理A、地理B共通である点にも、変化はなかった。

問題の形式については、1.「組合せ選択」の小問が多くみられること、2.地理A、地理Bともに地図や図表、グラフが多用されていることが指摘されたが、本試験同様、「組合せ選択」の小問数の多さが際立った。また、地理Bにおいては、本試験では少なかった文や文中の下線部の正誤を問う形式の小問数が例年並みとなったことなども指摘された。なお、地理Aを含めて、GISが特に意識的に使われているとの指摘はなかった。これらの点について以下に詳しく述べる。

1.について、解答に時間を要する原因の一つである6択以上の「組合せ選択」の形式は追試験においても多く、地理Aで7問、地理Bで9問出題された。この他に、例えば当てはまる国を選択するとともに文中の空欄に適語を入れるなど2×2の4択となっている「組合せ選択」の小問が、地理Aで8問、地理Bで7問みられ、全体として「組合せ選択」の小問が本試験と同様に非常に多かった。「組合せ選択」の問は、定番の形式として受け入れざるをえないが、安易に多用することがないように、本試験に引き続き強く要望したい。2.については、地理A（地図・図17，うち地理院地図2，表6，写真・絵・イラスト等7，グラフ12），地理B（地図・図16，うち地理院地図1，表4，写真・絵・イラスト等7，グラフ12）で、本試験同様、地図や表などを見て思考・判断する小問が多数みられた。地理である以上、適切に地図や図表を読み取る技能は重要であり、基本的には歓迎したい。ただし、高等学校までの学習を終えた生徒が理解に時間を要するような図表が多数出題されることがないように配慮をお願いすると同時に、グラフを含め地図や図表がこれ以上増えることのないようお願いしたい。なお地図については、追試験では地理A、地理Bともに地形図が用いられず、地理院地図のみからの出題で、他には基盤地図情報やGoogle Earthを用いた図が出題された。なお、GISを用いて作成されたとする図は、出題数が増加するだろうとの予測は多くあったが、追試験においても数は少なかった。

3 「地理A」について

全体を通じて豊富な資料が提示されたが、昨年度や本試験と比較すれば精選された印象である。

資料が精選された中でも、知識・理解をもとにした思考力や判断力について十分に問われており、そうした点における第4問の評価は特に高い。来年度以降についても、こうした作問の継続をお願いしたい。そうした中で、組合せ選択の小問は、30小問中17問を数えたことは、解答に要する時間が長くなる要因となっており、改善の余地があると考えられる。なお、2単位を標準とする地理Aでは、扱える学習の量はかなり限られたものとなり、細かな知識レベルを前提とした設問は成り立ちにくい。本試験と同様に追試験においても、概ね適切なレベルに作問された。また、初見と考えられるような写真が資料として用いられる際には、キャプションが添えられおり、こうした点への評価は高い。

第1問 「地理的技能とその活用, および日本の自然災害」 大問のタイトルが、本試験の「地図の読み取りと活用, および日本の自然災害」から「地理的技能とその活用, および日本の自然防災」へと変えられた。センター試験当時のようなメルカトル図法等の世界図を用いて問う小問はみられなかったが、地理的技能としての時差に関する小問が出題された。前半の3問が地理的技能、後半3問が災害や防災に関する小問で、災害や防災への意識が高い大問であり、防災の重要性を伝えるメッセージが込められたものとなっていた。GISを前面に押し立てた昨年度共通テスト(1)のような作問は、今年度は追試験においてもみられなかった。組合せ選択の小問が6問中5問を占めたが、全体の難易度は比較的低かったと考えられる。

問1 地理的技能としてセンター試験では定番であった時差に関する小問で、易。

問2 階級区分図の作成に関する小問。問1に続いて基礎的な地理的技能に関するもので、易。

問3 基盤地図情報により作成された等高線図の読み取りに関する小問で、標準的な難易度。

しかし、近年のセンター試験や共通テストでは、こうした等高線から地形を読み取る設問が減少しており、正答率は低かったと考えられる。

問4 提示された3枚の日本地図から火山、津波、土砂災害の危険性が高い地域を判別する小問で、易。

問5 自然災害に対する防災施設について説明した4つの文の中から適当でないものを選択する文選の小問。提示された写真から文の正誤を判断することは、容易。

問6 想定避難開始地点から3つの津波避難場所への避難経路と、それぞれの経路について示した文との組合せ選択の小問で、難易度は標準的。地図の読み取りについての技能と防災とを巧みに関連付けた工夫された問として評価したい。

第2問 「世界の生活・文化」 本試験同様に、特定のテーマからではなく生活・文化全般から出題された。大問全体としては標準的な難易度で、問2や問3のように、学習の範囲外と考えられるものが含まれるものについても、提示された資料から判断でき評価できる。ただし、問1から問5までが、図や写真などの資料から国や地域を判別する問の連続で単調であった点は、生活文化の大問らしい資料が揃えられていただけに、残念である。

問1 3地域とそれぞれの地域における伝統的住居の平面図との組合せ選択の小問で、標準的な難易度。イスラム圏の男女別の部屋や、熱帯地域の高床式を連想させる階段上の住居など、平面図から各地域を判断でき、工夫された問と評価できる。

問2 3か国とそれぞれの国の国家の歌詞との組合せ選択の小問。それぞれの歌詞に各国の自然環境や宗教が含まれている。国歌を取り上げた視点は面白いが、ブータンとパナマはイメージしづらく、難易度はやや高い。

問3 写真にキャプションが添えられた4か国の古くからみられるはきものの中からカナダのものを判別する小問で、難易度は標準的。写真だけではなくキャプションが添えられ、キャプションをもとに判断できる。

問4 3か国の1人1日当たり食料供給量とそれに占める動物性カロリーの割合を示した表2と、各国の特徴的な料理が示されたキャプション付きの写真2の中からモンゴルに当たるものをそれぞれ判別する組合せ選択の小問。表2についての判別は、難易度がやや高い。表2中の各国を判別し組合せる問か、写真2中の各国を判別し組合せる問のどちらかだけでも1小問としてそれぞれ成り立つ内容であり、全体として解答に要する時間に余裕がないことを考えれば、どちらか一つを問う小問で十分ではないかとの声も聞かれた。

問5 3か国について家計の消費支出を項目別に示したグラフから、スウェーデンと医療・保健の消費支出割合をそれぞれ選択して組合せる小問で、アメリカ合衆国の医療・保健に関する知識・理解があれば容易。

問6 世界各国の世界遺産について自然遺産と文化遺産を分けて示した円グラフと危機遺産について述べた文から、自然遺産に当てはまる凡例と危機遺産の文中の空欄に当てはまる語句とをそれぞれ選択し組合せる小問。解答に時間は要するが、難易度はやや易。

第3問 「熱帯域における生活・文化」 「生活・文化」とのタイトルが付けられているが、熱帯域を対象とした地誌的な大問であり、出題内容としては農業や食料問題が重点的に問われている。生徒の学習場面を想定し資料を提示しながら設問が進む形式で、問6では問題解決に向けて構想する学習場面を想定して作問されている。2×2の組合せ選択が半数の3問出題されているが、別の問い方も考えられたのではないだろうか。

問1 バナナの生産量と輸出量上位5か国を示したそれぞれの図と、バナナを生産と輸出について述べた文の空欄について、生産量上位となる図と文中に当てはまる語句をそれぞれ選択し組合せる小問で、容易。

問2 提示された雨温図から図中の位置と植生をそれぞれ選択し組合せる小問で、標準的な難易度。生活文化のタイトルではあるが、自然環境そのものについて問うている。前後の問とのつながりがあれば良かったのではないか。

問3 中央アメリカと東南アジアのキャプションが添えられたそれぞれの料理と、両地域の品目別食料供給量とを選択して組合せる小問で、第2問の問4と同じ構成。難易度は標準的。

問4 米とトウモロコシの地域別生産量の1980年の値を100とした推移を示したそれぞれのグラフと、東南アジアにおける米の主な生産目的について述べた文の空欄について、米に当たるグラフと文中に当てはまる語句をそれぞれ選択し組合せる小問で、問1と同じ構成。難易度は標準的。バイオエタノール原料としてのトウモロコシやネリカ米の増産について扱われた、工夫された問と評価する声があがる一方、サハラ以南アフリカのネリカ米を扱うことはやや詳細な内容ではないかとの声もあった。

問5 熱帯の食料問題について述べた文中の下線部の中から誤りを含むものを選択する小問で、容易。

問6 熱帯域の農業問題や食料問題について述べた4つの文の中から最も適当なものを選択する小問で、容易。

第4問 「地球的課題」 本試験同様「地球的課題」とのタイトルで、世界の結びつきが意識された小問はみられなかった。形式的には、1つの小問の中で2つの事項に関してそれぞれ選択し組合せる形式の小問が問4にみられただけで、解答に要する時間が少なく、また難易度も比較的lowであった。こうした大問が増加すれば、全体的に一つ一つの間に時間に余裕をもって取り組むことができることとなり、望ましい。

問1 石油の確認埋蔵量と可採年数について示したグラフに関して述べた4つの文の中から適当でないものを選択する小問で、容易。

問2 各国の1次エネルギー消費量について示したグラフに関して述べた4つの文の中から適当なものを選択する小問で、これも容易。

問3 地域別に示された森林変化に関する表中の中から3地域を判別する組合せ選択の小問で、難易度は標準的。

問4 水不足の要因について示した世界図と水不足に対する取組みについて述べた文の中から、経済的条件による水不足の地域とその地域の持続的な発展につながる取り組みをそれぞれ選んで組合せる小問で、易問。問題解決型の設問で好感が持てる。

問5 アジア、アフリカ、ヨーロッパの人口増加率を示したグラフから各地域を判別する組合せ選択の小問で、これも易問。

問6 世界の国の1人当たりGDPと平均寿命を示したグラフについて述べた文中の下線部の中から適当でないものを選択する小問で、易問。

第5問 「長野県飯田市の地域調査」 提示された資料を読み取って述べた文や文の下線部についての正誤を判定する形式の小問が冒頭に3問連続してやや単調な作りではあるものの、さまざまな資料を読み取りながら思考・判断していく構成は、地域調査に関する大問らしい構成のものであった。しかし、地形図や地理院地図を用いての地形や地図記号等の読み取りに関する小問はなく、地理Bでは全体問を通じてそうした地理的技能については出題されなかった。なお、地理A受験者にとって特に不利になる小問はみられなかったが、今年度追試験の第5問は、地理A第1問の「地理的技能とその活用、および日本の自然災害」が飯田市を舞台に出題された印象で、兩大問間で問われた内容が非常に近かったのではないかと思われる。難易度としては、本試験よりも非常に低くバランスは悪かった。近年作成された地域調査に関する大問の中では最も正解率が高い大問ではないかと考えられるが、このレベルのものが例年作成されれば、地理において高得点者の生まれにくい状況の改善に繋がるのではないだろうか。

問1 天竜川流域に関して示された3つの図について述べた文中の下線部の中から誤りを含むものを選択する小問で、図を丁寧に読み取って考えれば易。

問2 飯田市に関して示された3つの図から読み取って述べた4つの文から最も適当なものを選択する小問で、これも図を丁寧に読み取って考えれば容易。

問3 地理院地図の機能を活用して作成した図について述べた文中の下線部の中から誤りを含むものを選択する小問。前2問に引き続き、図を丁寧に読み取って考えれば易問。

問4 図上に示された飯田市街の4地点において示されたキャプション付きの写真の中から大規模火災の被害軽減策として当てはまらないものを選択する小問で、易問。

問5 リンゴとキュウリの東京および名古屋の中央卸売市場における月別都道府県別入荷量を示した4つのグラフから、東京市場におけるリンゴの入荷割合を選択する小問で、標準的な難易度。リンゴとキュウリの旬や、東京の全国との結びつき並びに名古屋と長野県との結びつきの濃さなどをもとに判断する小問で、愛知県や長野県の受験者にはやや有利であったが、地理的見方・考え方を問う良問としたい。

問6 日本の森林資源量について示したグラフに関する先生と生徒の会話文中の空欄に当てはまる文と、資料に示された森林資源の持続的活用に適した方法をそれぞれ選択して組合せる小問で、難易度は標準的。同じく学習の過程を想定し作問された第3問の間6等と同様、問題解決に向けて構想する学習場面が想定されており、評価したい。

4 「地理B」について（地理Aとの共通問題を除く）

大問構成と内容については、本試験と同様であった。全体を通じて豊富な資料が提示されたが、

今年度の追試験地理Aよりもさらに精選された印象である。地理はセンター試験当時から知識・理解をもとにした思考力や判断力について十分に問うており、昨年度共通テスト(1)のような作り込みすぎた印象の大問ではなく、今年度追試験のような、資料を精製した中で思考・判断させる問の作成を来年度以降も継続してお願いしたい。組合せ選択の小問は追試験でも非常に多く、30小問中16問を数え、半数を超えている。こうした点については、解答に要する時間が長くなる要因となっており、改善の余地がある。なお平均点は、本試験よりも低かったと考えられ、来年度以降の作問に当たっても、今年度追試験レベルの難易度での作問をお願いしたい。

第1問 「世界の自然環境と自然災害」 大問タイトルに「災害」は加わっているものの、災害について問われた小問は1つだけであった。6問中、前半の3問は知識・理解を前提とした問であったが、後半の3問は提示された資料から読み取り思考・判断して正答を選択する問であり、本試験と比較すると地理的見方・考え方を重視したものとして評価したい。大問全体の難易度がもう少し低くければ、さらに評価できる大問であったと考えられる。

問1 インドとメキシコの東西方向に引かれた線の両端の降水量からインドの7月のものを判別する小問。最も容易に解答が得られるインドの7月が出題されており標準的な難易度であるが、その他のものに解答を求められれば難易度は非常に高かったと考えられる。

問2 3地点における写真に示された植生と、文に示された土壌の特色との組合せ選択の小問で、比較的易。

問3 図中の3地点の湖と、それぞれの最大水深と塩分濃度が示された表との組合せ選択の小問。図中においていずれが断層湖と塩湖かが判別できれば正解できるが、やや難しい。

問4 関東地方における温暖期と寒冷期の海岸線をそれぞれ示した図と、図に関して述べた文について、温暖期に当たる図と文中の空欄に適する語句を選んで組合せる小問。学習機会が少ないと考えられる内容で、これもやや難しい。

問5 港での突堤建設にともなう海岸線の変化を示したグラフと突堤付近が撮影された写真を資料に、図と写真から考えられることがらについて述べた4つの文の中から最も適当なものを選択する小問。初見のグラフと写真の解釈に時間がかかるとともに、4つの文の正誤を判断するにも時間を要し、難易度はやや高い。地形の形成要因や人工物による地形の改変に関して考察させる工夫された問であるが、こうした問に受験者がじっくりと向き合うためには、他の小問での資料の精選が不可欠である。

問6 津波に関して、津波災害を受けた地域の地形と被害の様子を示した図を読み取って述べた文の中から適当ではないものを選択する小問。2枚の図を比較しながら丁寧に読み取れば難易は高くない。

第2問 「製造業のグローバル化」 本試験での「持続可能な資源利用」と同様に、特定の分野からの出題であった。本試験でも指摘したが、産業の各分野からの出題を望む声は大きい。製造業のグローバル化に関する大問ではあるものの、世界図が用いられた出題は1小問だけであった。地理においてグローバル化を学ぶ生徒たちの学習過程を想定した設問であるならば、世界図をはじめとした地図を積極的に用いての作問が望ましかったのではないだろうか。

問1 自動車産業のグローバル化に関する新聞記事と国別の自動車生産台数を示したグラフに関する生徒の会話文中の空欄にそれぞれ当てはまる語句と記事を選択して組合せる小問で、難易度は低い。資料の選び方に工夫がみられると評価する声がある一方、発行年や国名、自動車メーカー等が伏せ字となった記事を資料として扱うことについては疑問の声もあった。

問2 衣類、航空機、テレビと、それぞれの輸出金額上位15か国・地域と金額に占める割合を

示した世界図との組合せ選択の小問で、標準的な難易度。

問3 日本企業の進出先である3か国と、各国における海外現地法人に占める製造業と非製造業の割合を示した統計表から、製造業とアメリカ合衆国をそれぞれ選択し組合せる小問で、これも標準的な難易度。

問4 産業別人口割合の推移を示した三角グラフと、グラフ中に示された3か国における製造業のグローバル化と産業構造の変化について述べた文との組合せ選択の小問。難易度は標準的。本試験でもみられた、国名を明らかにしない中で論理的に思考・判断する間で工夫されている。

問5 世界各国の知的財産権使用料の受取額と支払額を示したグラフに関して述べた文中の下線部の中から誤りを含むものを選択する小問で、この問は容易。正解となる誤りの文は再検討の余地がある。

問6 先進国と発展途上国のそれぞれのグローバル化における課題と今後の取組みについて示した資料中の空欄に当てはまる語句の組合せ選択の小問で、これも易。

第3問 「人口と都市」 本試験と同じく都市と人口分野からの大問で、「生活文化」の小問はみられなかった。人口分野への比重が高く、大問タイトルも本試験の「村落・都市と人口」から反転させたものとなっている。提示された統計資料についての知識・理解を求める前半の3問と、提示された統計資料をもとに思考・判断する後半3問の構成で、バランスの取れた大問との印象が残る。

問1 4か国における人口密度と人口増加率を示した統計表からアルジェリアに当たるものを選択する小問。難易度は標準的だが、アルジェリアやカタールが取り上げられていることで判断に迷った受験者の割合が増加したと考えられる。

問2 3か国における人口千人当たりの死亡数と年齢別人口構成を示したそれぞれのグラフからアメリカ合衆国に該当するものを選んで組合せる小問で、難易度は標準的。9択の問となっているが、どちらか一つのグラフだけを提示して当てはまる3か国を判断する6択の小問とすることで、受験者の負担を減少させることもできたのではないかとの声も上がった。

問3 先進国と発展途上国の都市人口と農村人口の推移を示したグラフから先進国の都市人口を選択する小問で、容易。

問4 2000年と2020年における世界都市上位20位の分布を示した模式的世界図と、世界都市について述べた文に関して、2020年に世界都市上位20位から外れた都市を示した凡例と文中に適切な語句をそれぞれ選択する組合せの小問で、工夫された資料が提示されている。難易度は低い。

問5 中京圏における世帯総数に占める各世代が含まれる割合について、高齢者夫婦のみ世帯、20～29歳の単身者世帯、乳幼児のいる世帯を示したそれぞれの図を判別する組合せ選択の小問で、標準的な難易度。高位だけを示すなどした方が分かりやすい図だったのではないかと指摘もあった。地図の見づらさは極力解消していただくことをお願いしたい。

問6 大都市圏郊外のニュータウンにおける3つの時期の人口ピラミッドと、それぞれの時期に地区で生じていた現象との組合せ選択の小問。各時期の人口ピラミッドを読み取るだけではない工夫された問である。

第4問 「ヨーロッパ」 本試験の「ラテンアメリカ」に対して、追試験では先進地域の「ヨーロッパ」からの出題となった。本試験では出題された比較地誌的な設問はみられなかった。系統地理の各分野から出題されており、静的地誌学習が意識された大問であった。学習機会の多い地域であるとともに大問全体の難易度も比較的low、受験生は取り組みやすかったものと

思われる。

問1 4地点の雨温図を判別する小問で、容易。問題の作りもシンプルで受験生が安心して取り組みめる。

問2 図中に示された3地点と、キャプションが添えられたそれぞれの地点の3枚の写真との組合せ選択の小問で、難易度は標準的。

問3 人口密度、外国生まれの人口の割合、第1次産業就業者割合が示されたそれぞれの階級区分図を判別する組合せ選択の小問で、難易度は低い。

問4 空港からの出発旅客数と貨物量がそれぞれ上位となるEU圏内上位12都市と、各空港における目的地を示したグラフについて、貨物量を示した図とEU圏外への出発割合を示した凡例をそれぞれ選択して組み合わせる小問。難易度は高いが、題材もよく、知識・理解をもとに思考・判断する工夫された問として評価したい。

問5 図中に分布が示された3つの同系統の言語と、それぞれの言語について述べた文との組合せ選択の小問で、歴史的背景を踏まえた地理学習が意識された問。受験生が苦手とする分野からの知識・理解に関する問で、難易度はやや高い。

問6 褐炭の採掘場とその周辺の閉山前後の土地利用の変化を示した図に関して述べた文の下線部の中から適当ではないものを選択する小問。難易度は低い。産業遺産の活用・保存について取り上げた問で、学習のヒントとなる問として評価したい。

第5問 「長野県飯田市の地域調査」 第5問の評価は地理Aでの記述の通り。

5 要 約

追試験の地理A・地理Bを小問単位で検証した結果、本試験同様に、これまでのセンター試験や昨年度の共通テストと同じく、高等学校までの学習内容に沿った小問が大多数で、学習範囲を逸脱した難問や奇問はみられなかった。本試験においても追試験においても、そうした試験が作成されたことについては、高く評価したい。また、思考・判断を重視した小問も多く、地理的な諸課題の解決に向けて構想する力を問うものもみられた点についても、評価したい。なお、これまで、地理Aで出題された熱帯域の地誌のように、あまり学習機会のない地域の出題にあたっては、知識に偏らないようお願いしてきたが、追試験の地理Aはそうした点への配慮も行き届いたものであったと考えられる。本試験の要約においても触れた内容ではあるが、地理は、これまでのセンター試験においても、昨年度からの共通テストにおいても、地理A、地理Bともに、知識をもとに思考・判断する力について十分に検証できる問題作りが行われてきており、作問にあられた先生方のご苦労にあらためて感謝したい。しかし一方で、知識をもとに思考・判断するための材料として、多様で豊富な図や表、資料が提示され過ぎるくらいが見受けられ、そうしたことが高得点者の割合が低い要因の一つとなっている。日本史や世界史でも地理と同様に多様な史資料をもとに思考・判断する問が増加するのでなければ、地理においても、一問一答の知識・理解をストレートに問うような小問を増やし、思考・判断を伴う小問の解答に費やす時間を増やしてもよいと思われる。そうした中では、今年度の追試験地理Bは、比較的資料数が絞られた印象であり、今後の作問の参考にしていただくことをお願いしたい。

本会ではこれまで、1.基礎・基本としての必須な知識を整理し、それを前提に作問し、それ以上のレベルの知識には必ず情報を与えること、2.授業で扱うことのない専門性の高い内容や未だ研究段階で諸説あるような内容を安易に出題しないこと、3.専門性の高い作問者の常識と受験生のそれとの落差に留意すること、4.解答にかかる時間に十分に配慮すること、を重点としてお願いしてきた。本試験に引き続き、1.～3.については、おおむね要望が叶えられたが、4.について

は今後も、個々の資料に対する思考・判断の時間を確保するためにも、資料等の精選に努めていただきたい。

共通テスト2年目の今年度も、本試験，追試験ともに、作問者の先生方のご苦勞を強く感じ取ることができた。来年度以降も、われわれの手本となる問題の作成が行われることを期待して追試験の講評を終わる。